総合的な学習の時間部会

＜県研究主題＞
生徒一人ひとりの生きる力をはぐくむ指導計画及び指導の工夫・改善

提案１　　提案者　狩野　望（県央地区）

＜研究主題＞
主体的な学びを引き出す探究活動の工夫
―　指導計画（単元計画）及び指導の工夫をとおして　―

１　提案内容

本校では、毎年２年生が「職場体験学習」を行い、社会性を学ぶ貴重な体験学習である。全員の取組が主体的でなく、本学習の在り方を再考し、社会人として大切なことを学ぶ学習として位置付け、自分の将来について自ら考え、選択できるようにしたいと考えた。

そのため、生徒自身が職場体験学習を主体的に捉え、学ぶため「生徒に学習の見通しをもたせ、生徒自身が課題や活動を自分に関わりあることとして感じることができるような指導を工夫することで、主体的な学びを引き出せるのではないか」との仮説を立て、研究を行った。

（１）　研究内容

この仮説を検証するため、単元を組み立て４つに分け、各過程において次の工夫を行った。

①　課題の設定（７時間）

ア　事業所選びのアンケートの取り方により、職場体験学習が単なる体験ではなく、社会人として大切なことを学ぶものと伝え、意識を高めた。

イ　予定表の提示で活動の見通しをもたせ、全体計画を随時確認しながら学習を進めた。

ウ　求人広告と履歴書の提示で勤務形態等に注目し、職業探しの流れから現実感をもたせた。

エ　昨年度の様子を、写真で上級生の活動の様子を掲示し、馴染みのない職種に関心をもたせ、その職場で働くうえで気を付けることなどについて考える機会とした。

オ　職場体験学習で調べたいことや疑問に思ったことを、課題意識をもって調べるため、事前に調べられたこと、体験しないとわからないことに分け、学習に臨んだ。

カ　ウェビングマップの活用で「社会人として大切だと思うこと」について、事業所での活動を通して検証するという意識をもたせた。

②　情報収集（１７時間）実際の活動から、自らの疑問や課題を解決するための機会とした。

③　整理・分析（４時間）

ア　印象に残ったことに順位を付け、まとめの中心となる把握のために順位付けを行った。

イ　事前作成のウェビングマップを活用し、改めて社会人として大切だと思うことを考え、自らの変容を知るとともに、実体験から最も学んだものを整理し、学習の振り返りとした。

ウ　発表用模造紙のレイアウト例を提示し、中心課題を明確にした。

④　まとめ・表現（２時間）

発表を主体的に聞くことで、友だちがどう感じたのかを互いにシェアし、幅広い視野をもつため、ワークシートを工夫した。

（２）　成果と課題

学習の見通しを持ち、生徒は一貫して課題を意識しながら活動を行った。まとめの発表会では、単なる職場紹介に終わらず、自分が体験し感じたこと、他の生徒が感じたことを重ね

合わせて「社会人として大切と思うこと」を改めて振り返ることができていた。

また、求人広告や履歴書の実物を示し、事前に調べ学習を行い、体験しなければわからないことを焦点化させた。さらにウェビングマップの活用で、課題を明確にでき、また事後の活用で考えを深め、考えの変化に気付かせるなど、小さな工夫を組み合わせることで主体的に学ぶ生徒の姿が見られた。

課題としては、２年生での取組を３年生の進路に向けてどう生かしていくか、また学校として次年度以降も継続させていけるかが考えられる。また、ただやるというのではなく、生徒の実情に応じてより良いものを目指して、アレンジし続ける姿勢が必要となる。

２　協議内容

協議では、単元計画の中で総合的な学習の時間として扱えない部分があるのではないかとのことや特別活動の「自分を知る」こととのリンクで効果が大きいこと、事業所にその学校ならではの場所があるといいこと、３年間のつながりが大切であることなどが話し合われた。

３　まとめ

今回の取組では「社会人として大切なことは何だろう」という疑問形であること、まとめの方法が、各教科での取組と同じでパターン化されていることで、職員の意識統一が図られていること、ウェビングマップの上手な活用、「活動あって学びなし」ではない取組があることなどが良い点として挙げられる。

今後は、今あるものを改善し続けていく取組が重要になる。また、小さな工夫の積み重ねに加えて、全体を作り直していくことも求められる。

提案２　　提案者　関井　隆志（相模原地区）

＜研究主題＞
中学校の総合的な学習の時間における取り組み
―　意欲・判断・表現・共生それぞれの力の育成をめざして　―

１　提案内容

本校の学校教育目標は「意欲・判断・表現・共生」という４つの柱があり、授業を行ううえでこの柱との関連性を意識し、主体的、協同的、創造的な活動を取り入れた教育内容を実践する。更に言語活動に重点を置いて４つの力の育成を目指すことは、総合的な学習の時間における目標そのものを達成することにつながると考える。

（１）　３年間を見通した主な総合的な学習の時間における実践

①　１、２年次の取組

ア　１年次…職業インタビュー

将来の夢や目標を描くための一助とし、働くことの意義についての理解をねらいで、身の回りの大人２人に職業インタビューを行った。グループで発表して相互評価をし、学級の代表者は学年発表を行い、発表する力、聞く力も身に付けることができた。

イ　２年次…職場体験活動を中心とした取組

２日間の体験後に１人１枚の新聞を作成し、「地域の先生」という学習場面を設定し、外部講師（青年会議所から書店経営者、保育園園長）の講話を聞いた。更に、県社会保険労務士会の社会労務士による少人数形式での出前授業を行った。

②　３年次の取組

学校説明会への参加し、進路に関することと、調べ学習に対する意識に関するアンケート調査を行い、その考察から課題と取組を決定した。

ア　１学期…学校説明会に参加するにあたり、申し込み方法や心構え、マナーについての指導と、夏休み以降の進路学習の流れの確認を行った。

イ　夏休み…学校説明会への参加。まとめの新聞の原稿作りを行った。

ウ　２学期以降…アンケートの結果を分析し、自らの課題を設定した。説明会等に参加した結果を新聞にまとめた。

学級での報告会は５～６人で班を作り、順番に発表（学級報告会①）。各班で１名の代表者を選び、学級で発表（学級報告会②）。更に学級１名の代表者は学年報告会を行った。

（２）　３年次の取組における「手立ての手順と育成される力」

学校説明会への参加、アンケート結果考察、新聞作成、学級報告会、学年報告会について、意欲（主体的活動）、判断、判断・表現（創造的活動）、共生（協同的活動）

（３）　研究の成果と課題

事後アンケートでは、「進路学習全体を通してできたこと」の「意欲・判断・表現・共生」それぞれの力がどれだけ身に付いたか検証し、「自分で情報を収集する力が身に付いた。」など多くの生徒が４つの力が身に付いたと答え、将来は「情報を人に分かりやすく伝える力、プレゼンテーションなど、相手により理解してもらいたい場面で発揮できる。」と考えている。

２　協議内容

（１）　発表について

発表の目的は、聞いている生徒の側から様々な観点や視点があることを知ることで、班でシェア、学級でシェアすることによって皆で共有することができる。

（２）　学級報告会②の発表評価シートについて

分かりやすい表現・発表は、指導する教員が共通認識をもつことが大切である。今回はスキルに重点をおき、内容は生徒にとって大切で、簡潔にまとめることが重要である。更に相互評価でお互いを評価するのは１年次から行っているため、「批判」でなく「改善点」まで言えるようになってきている。

３　まとめ

（１）　３年間を見通した総合的な学習の時間の計画と実践

国の示す規準として定められた目標、学校教育目標とどのように位置づけるかがポイントで、小学校とのつながりを意識して中学校の目標を設定していくことも重要である。

最終的には「自己の生き方」「学んだことが生き方を考える」ことに結びつくかの把握が必要である。１～３年次のテーマ設定の理由、更に３年間を見通した上での指導が重要である。

（２）　探究と協同

体験が目的と考えがちであるが、体験により何をねらっているのか、何を深められたのかをとらえることが大切である。更に学んだことが他の学習等に活かされるか、特別活動や道徳の計画とも関連すると考えられる。

探究を深めるとは、情報を発表により発信し、他の人の考え方を吸収するという整理、分析をどのようにしていくかが必要である。生徒にとって今の生活を見直し、今後の生活にどのように還元していくか、また学校生活をどう変えていくかを見極めていくことである。

（3）　評価のあり方

「感想」とは自分の感じたこと、「考察」とは初めに立てた仮説等に対し考えを示し、更に課題を見付けることである。事前、事後のアンケートなど、身に付いた力を検証する手立てをもっているか、課題をきちんと分析して、次年度に改善し、PDCAサイクルは毎年生徒の実態に合わせてリニューアルする。総合的な学習の時間に学んだことが、自分のキャリア形成に生かされていることを実感しているかが大切である。

4　各グループの発表内容

・学校の体制づくりや継続的な単元の配置などの必要性があり、課題の設定をどう充実させるか、身に付けた力を評価できるよう、相互評価を取り入れると良い。評価や発問の工夫、具体的な個人課題の設定が困難で、評価は何を用いてどう評価するか。

・目標・ゴールの設定が大切で、３年間でどう育てるか、卒業後の生き方を見据えた指導が大切。評価や見取りのすり合わせが困難で、自己評価の扱い、書かせ方や教員のイメージが必要。

全体協議　「育てたい力を明確にする探究的学習について」

・生徒側では、興味、主体性をもって学習に臨める工夫、あこがれが必要で、教員側では、学習の体制が１～３年までの継続的な学習や単元のつながりや位置づけなど学習の継続性がある。

・学習で教員間の共有、小学校や前の学年からのつながり、単元のつながりを考える必要がある。課題の設定をどう充実させるかは、生徒がモチベーションをもつことである。最終的に身に付けた力を生徒にどう表現させるかが課題で、方法は新聞・振り返り・評価用紙がある。

・３年間を見通して付けたい力で生き方として、個人課題の設定を手立てに色々な年齢の人との関わりのなかで情報を取捨選択し、地道に取り組んでいる生徒を評価する。

・目標、ゴールをしっかり持ち、１つ１つの活動でなく、３年間でどんな力が付いたかで見る。卒業後の生き方、共有、すり合わせには計画で見通しを持ち、自己評価の扱いを留意しつつ、教員の評価は子どもの「姿」をイメージして行う。

・探究課題の設定は自分のこととして考えさせ、地域、社会との結びつきや学校の体制は核となる教員のもとで推進する。

・「学習方法に関すること」では情報やプレゼン、「自分自身に関すること」では意欲、粘り強さ、自己の生き方、「他者や社会との関わりに関すること」では広い視野、社会に出て通用する仲間との協同について、教員側の願いとしてある。課題は、生徒個人が学びの必然性を発見できるかである。

5　まとめ

子どもにとって思考ツールが効果的であるか、全体計画の中で身に付ける部分、総合的な学習の時間としてカウントされているか。子どもの現状に応じた学習、言語活動を意識しているか。

全体計画では既存の全体計画をベースとして、不適切な部分を矯正する。必須項目は①目標、②資質や能力及び態度、③内容であり、体験や調べ学習で終わりとならないようにする。課題設定では「〇〇が〇〇なのはなぜか」を考え、思考ではデータの示し方や付箋やピラミッドチャートなど思考ツールでの可視化や操作化などがある。